TADOKU JUNIOR　せかいのなぜなに神話　★★★☆☆ ふつう　733語

Why all Men love the Moon

どうしてみんなお月さまが好きなの？

Florence Holbrook（1902年の本）　原文そのまま　朗読：Catrina

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　かみなりといなずまのごちそうの会に、お日さま・風・お月さまの三きょうだいがまねかれました。家で待つお母さんへのおみやげは？



Thunder and Lightning were going to give a feast. It was to be a most delightful banquet, for all the good things that could be imagined were to be brought from every corner of the world.

For many days before the feast these good things were coming. The birds flew up with what they could find in the cold air of the north and the warm air of the south. The fishes came from the east and from the west with what they could find in the cold water or in the warm water. As for what grew on the earth, there was no end to the luxuries that came every morning and every evening. Squirrels brought nuts, crows brought corn, the ants brought sweet things of many kinds. Food that was rich and rare came from India and Japan. The butterflies and the humming-birds were to arrange the flowers, the peacocks and the orioles

promised to help make the place beautiful, and the waves and the brooks agreed to make their most charming music.

Thunder and Lightning were talking about whom to invite, and they questioned whether to ask the sun, the moon, and the wind. These three were children of the star mother.

"The star mother has been so kind to us that I suppose we ought to invite her children," said Thunder.

"The moon is charming, but the sun and the wind are rough and wild. If I were the star mother, I would keep them in a corner all day, and they should stay there all night, too, if they did not promise to be gentle," said Lightning.

"We must invite them," replied Thunder, with what sounded much like a little growl, "but it would be delightful if they would agree to stay away, all but the moon."

That is why the sun and wind were invited as well as the moon. When the invitation came, the two brothers said to their little sister, "You are too small to go to a feast, but perhaps they asked you because they were going to ask us."

"Star mother, I think I will stay at home," said the moon tearfully.

"No, little moon," replied the star mother; "go to the feast with the other children."

So the three children went to the feast, and the star mother waited for them to come home.

When they came, she asked, "What did you bring for me?" The hands of the sun were full of good things, but he said, "I brought only what I am going to eat myself," and he sat down in a corner with his back to the others, and went on eating.

"Did you bring anything for me?" she asked the wind.

"I brought some good things halfway home, and then I was weary of carrying them," answered the wind, "so I have eaten them."

"I should never have imagined that you would be so selfish," said the star mother sadly, and she asked the little moon, "My daughter, did you bring anything for me?"

"Yes, star mother," answered the little moon, and she gave her mother more good things than any one had ever seen in their home before. There were rare luxuries that the fishes and the birds had brought. There were rich colors that the peacocks and orioles had promised, and there was even some of the charming music that the waves and brooks had agreed to make.

The star mother praised the little maiden. Then she looked at her two boys. She was sad, for she knew that they must be punished for their selfishness. "Sun," said she, "you wish to turn your back on all, and your punishment shall be that when the warm days of summer have come, all men will turn their backs on you." To the wind she said, "Wind, you thought of no one but yourself. When the storm is coming and you are afraid and fly before it, no one shall think of you. All men shall close their doors against you and fasten them." Then to her little daughter she said, "My little moon, you were unselfish and thoughtful. You shall always be bright and beautiful, and men shall love you and praise you whenever they look upon your gentle, kindly face."

This is why men hide from the sun and the wind, but never from the moon.

かみなりといなずまが、ごちそうの会をひらくことになりました。それはそれはすてきなえんかいになるはずでした。思いつくかぎりのおいしいものが、世界のすみずみから運ばれてくることになっていたからです。

ごちそうの会の何日も前から、そのおいしいものがとどきはじめました。鳥たちは、北のつめたい空や南のあたたかい空で見つけたものを持って、とんできました。魚たちは、つめたい水やあたたかい水で見つけたものを持って、東から西からやってきました。地上でとれるものは、朝も夕方も、ぜいたくなごちそうがかぎりなくとどきました。リスは木の実を、カラスはトウモロコシを、アリはいろいろなあまいものを持ってきました。インドや日本からは、ゆたかでめずらしい食べ物がとどきました。チョウとハチドリは花をかざることになり、クジャクとコウライウグイスは会場を美しくするのをてつだうとやくそくし、波と小川はいちばんすてきな音楽をかなでることを引きうけました。

かみなりといなずまは、だれをまねくか話しあっていて、お日さまとお月さまと風をまねくかどうか、まよっていました。この三人は、星のお母さんの子どもたちでした。

「星のお母さんにはとても親切にしてもらったから、子どもたちをまねくべきだろうな」とかみなりが言いました。

「お月さまはかわいいけれど、お日さまと風はらんぼうで、あばれんぼうだよ。もしわたしが星のお母さんだったら、あのふたりは一日じゅうすみっこにすわらせておくね。おとなしくするとやくそくしないなら、夜のあいだもずっとそこにいさせるよ」といなずまが言いました。

「まねかないわけにはいかないさ」とかみなりは、小さくうなるような声で答えました。「でも、お月さまのほかは来ないでくれたら、ありがたいんだがね。」

そういうわけで、お日さまと風も、お月さまといっしょにまねかれたのです。しょうたいがとどくと、ふたりの兄は小さな妹に言いました。「おまえは小さすぎて、ごちそうの会には行けないよ。たぶん、ぼくたちをまねくついでに、おまえもまねいたんだろう。」

「星のお母さん、わたし、家にいることにする」とお月さまは、なみだぐんで言いました。

「いいえ、小さなお月さん」と星のお母さんは答えました。「ほかの子たちといっしょに、ごちそうの会に行きなさい。」

こうして三人の子どもはごちそうの会に出かけ、星のお母さんは子どもたちが帰ってくるのを待っていました。

子どもたちが帰ってくると、お母さんはたずねました。「わたしに何を持ってきてくれたの？」お日さまの手はおいしいものでいっぱいでしたが、お日さまは「自分で食べる分しか持ってこなかったよ」と言って、みんなにせなかを向けてすみっこにすわり、食べつづけました。

「あなたは何か持ってきてくれた？」とお母さんは風にたずねました。

「おいしいものをとちゅうまで持ってきたんだけど、運ぶのがいやになっちゃって」と風は答えました。「だから食べちゃった。」

「あなたたちがこんなに自分のことしか考えないなんて、思ってもみなかったわ」と星のお母さんはかなしそうに言い、小さなお月さまにたずねました。「むすめや、あなたは何か持ってきてくれた？」

「はい、星のお母さん」と小さなお月さまは答えて、家でだれも見たことがないほどたくさんのおいしいものを、お母さんにあげました。魚や鳥が運んできた、めずらしいごちそうがありました。クジャクやコウライウグイスがやくそくした、ゆたかな色もありました。波や小川がかなでた、すてきな音楽まで少しありました。

星のお母さんは、小さなむすめをほめました。それから、ふたりのむすこを見ました。お母さんはかなしくなりました。自分のことしか考えなかったふたりに、ばつをあたえなければならないとわかっていたからです。「お日さま」とお母さんは言いました。「あなたはみんなにせなかを向けたがりました。だから、ばつとして、あたたかい夏の日が来たら、人はみんなあなたにせなかを向けるでしょう。」風にはこう言いました。「風、あなたは自分のことしか考えませんでした。あらしが来て、あなたがこわがってその前をにげていくとき、だれもあなたのことを思ってくれないでしょう。人はみんな、あなたが入らないように戸をしめて、かぎをかけるでしょう。」そして、小さなむすめにはこう言いました。「わたしの小さなお月さん、あなたは自分のことよりも人のことを考える、思いやりのある子でした。あなたはいつまでも明るく美しく、人はあなたのやさしい、やわらかな顔を見るたびに、あなたを愛し、ほめたたえるでしょう。」

だから人は、お日さまや風からはかくれても、お月さまからはけっしてかくれないのです。

たんご と クイズ　どうしてみんなお月さまが好きなの？

Thunder	かみなり	Lightning	いなずま	nuts	木の実
corn	トウモロコシ	butterflies	チョウ	peacocks	クジャク
moon	お月さま	feast	ごちそうの会		

Q1 お日さまと風とお月さまのお母さんはだれ？

① かみなり　② 星のお母さん　③ 大地

Q2 風は、おみやげをどうした？

① とちゅうで食べてしまった　② お母さんにわたした　③ お月さまにあげた

Q3 お母さんにたくさんおみやげを持ってきたのは？

① お日さま　② 風　③ お月さま

こたえ

Q1 ②　お日さまと風とお月さまの三人は、星のお母さん（the star mother）の子どもたちでした。

Q2 ①　風は、おみやげをとちゅうまで運んだけれど、運ぶのがいやになって、食べてしまったと言いました。

Q3 ③　小さなお月さまが、家でだれも見たことがないほどたくさんのおいしいものをあげました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #22420（Florence Holbrook、1902年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：Catrina（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。